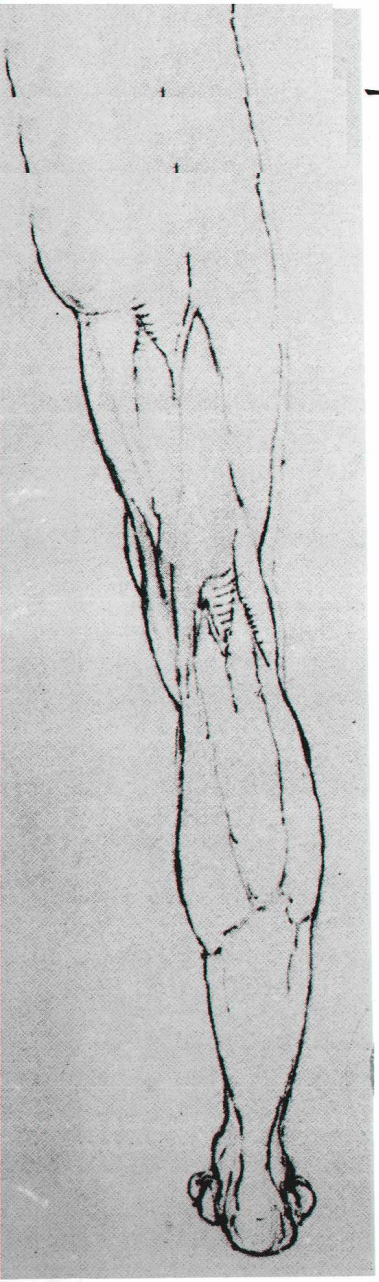
男の世界

石原慎太郎



世界

石原慎太郎著

集英社

男の世界

一九七一年十一月二十五日初版印刷
一九七一年十一月三十日初版発行

定価　五八〇円

著者　石原慎太郎
発行者　陶山巖
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　東京(265)六一一一
振替　東京　一五六五三

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします。
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

© 1971　S. Ishihara

0093-770084-3041

目

次

男の世界 9
男の自負 16
男の勇気 21
男の度胸 27
女たちへの涙 33
ランナーの死 39
殺意 46
男のお伽話 53
慎ましさの男らしさ 59
男の胸中 65
どんな女が—— 71
男友だちの喧嘩 77

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

男と男　83
男の傷　90
一匹男　97
男の遍歴　103
人を殺した男　109
死への直視　115
プロ　121
復讐者　128
賭博者　135
走る　141
昔の名選手　147
仮面　153

路上にて 159
狩猟 166
国家の女性化 173
フィーリング 179
別れた女 185
煙草を吸う女 191
敗れた男 197
天才の勇気 203
女を眺める 209
変身 215
死とは—— 221
男の余裕 227

男の言い訳 234
ドゴールの暗示 241
暴力 248
男の金の使いかた 253
ホモとレズの差 259
ボクサー 266
タッチングな―― 272
友達 279
秋の雨 286
旅 292
自殺 297
何のためなら死ねるか 303

装幀　池田満寿夫

男の世界

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

男の世界

男が男である限り、男が男でしかない限り、そこには女には絶対あり得ない何かがある。それを男の特質とするなら、それを理解しない限り、たち入ることの出来ぬ男だけの世界がある筈だ。

勿論、現実の世界には男がい、女がいる。

しかし、たといそこに女が一緒にいようと、彼女たちの理解を超えた、眼に見えぬ別の世界がある。男だけが理解し、男だけが共感し、男だけが悲しみ、歓び、笑い、泣くことの出来る世界が。

「勝者には何もやるな」、とヘミングウェイがいい切り、それが本当の男の条理として共感され

る世界。

「死、死などない。俺だけが死んでいく」とマルロオが讃い、行為に果てていく男のその不遜さが、じんと伝って来る世界。

そこには、他に誰もいない。ただ、本ものの「男」だけがいる。

決して大仰に嵩ぶったものではなく、渚のホテルの潮風がかすかに吹き込む人気のない夜のラウンジで、マティニをすすりながら聞く、シェアリングのピアノのタッチのように、忍び込んで来て心の奥に留る、男という楽士だけがハモることの出来る情感、情緒がある。

しかし、男らしさとは何なんだろうか。

男らしくない奴のことを、人は女々しいという。英語なら、ただ、弱いとか卑怯とか臆病とかいうだろうに、俺たちの言葉では、それに、女という字を二つ重ねて当てる。

しかし、女が弱くて、卑怯で、臆病というのではない。彼女たちの方が、ある場合、男たちよりはるかに強く、勇気あることはざらにあるのだ。

だのに、何故、女々しい、という。

つまり、そこが、男と女の違いなのか。

つまり、男は、女よりも、いかなる時も、強く、勇気ある、大胆なるものでなくてはならぬ、

ということか。

確かに、一旦ことある時、何かが我々の肉体生命をおびやかそうとする時、女よりも先に男がそれに立ち向わなくてはならぬ。

国と国の戦さでも、部族同士の闘いでも、家と家の争いでも、そして、人間対人間の諍(いさか)いでも。

それは当り前のことだ。

しかし、何故当り前なのか。

それは、男が男であるということだけのためにではないか——。

もう一度、男らしさとは何なのだろうか。

俺は思う。それは自己犠牲だ。それも、沈黙のうちに行われた、他人への献身のための、自己犠牲だ。

それこそが、一番男らしい男らしさだと思う。

言葉はいらない。他人のために、すべての意味で愛するもののために、黙って自らの生命をすら捧げることの出来る、ということ。

男が男であることのために、言葉はいつも虚しい。

だから、小説家は絶対に、男らしくあることなど出来はしない。

俺がもし、いつか、ある時、あるところで、真に男らしくあったとしたら、俺はそんな自分に

ついて他人には語らぬだろうし、他人に、それを語ることを許しもしまい。
人生のある瞬間に、男が真の男であり得たということは、男にとってかけがえのない勝利ではないか。
だから、勝った奴には、何をやる必要もないのだ。言葉すらも。

女は他の何よりも、その、ものいわぬ、沈黙の内に自らを犠牲にすることの出来る男をこそ、愛さなくてはならぬ。
しかし、女には、男のその特性を理解することが出来ない。いや、理解はしても、感じとることが出来ない。
男には、男同士には、それがわかる。
しかしまた、男はどのように共感しようと、その相手を、女が愛するように愛してやることは出来はしない。
自らの献身と犠牲について語ることを潔しとしないながら、その犠牲のかけがえの相手にそれが、理解ではなし、ただ伝わり響くことだけを男は願う。その伝わりの、言葉ではない、音ではない反響のためだけに男は死ねる。
しかし、男にはその共鳴が出来ても、女には、彼女が女であるために、それが出来ない。

ある状況での男と女の愛は、男が男らしく、女が女らしくある時、その悲劇的な格差のために痛ましい形をとる。或いは、痛ましく滑稽な形をすら。

今まで、どれだけの素晴しい男たちが、女のために、無駄ともいえる死に方をしたことか。

しかし、他人はそれを無駄と思っても、男は瞑目して自分を捧げただろう。そしてその死は、女が流して見せる涙を拭うハンカチの刺繍の飾りの一つぐらいにはなっただろう。

2

不世出の闘牛士といわれたファン・ベルモンテは、そうした世評を負いながら生きおおせた数少ない闘牛士の一人でもあった。

彼が年齢の限界で尚惜しまれながら、生きて、しかも満足な五体で引退出来たのは、彼が他の、真夏の午後に死んだ仲間たちより臆病であったせいでは決してない。彼は、死んだ彼の僚友たちよりむしろ大胆で、そして何より彼らよりも沈着で、正確だった。

引退した後、彼は闘牛用の牛を育てる大牧場の牧場主になった。人々は、彼の牧場がコロシアムに届けるたくましい牛を眺める度に、それと同じ牛をかつて鮮かに屠った彼のムレタさばきを思い出した。

引退後、尚消えることのない名声の内に、何の憂いなく暮していたベルモンテは、一九六三年の秋、突然自殺した。

人々はいわれもないその自殺に驚き、その理由を探そうとしたが、出来なかった。

一年たち喪が明けた後で、彼の親友の一人が、初めて彼の死の正しい訳を周囲に明かした。それも、一人の若く美しい娘が幸福な結婚をし、死んだ闘牛士の遺書によって思いがけぬ遺産をもらった後のことだった。

その娘はベルモンテの秘書をしていた。そして、ベルモンテは彼女と恋に落ち、彼女も彼を愛した。

しかし、初老の彼は、自分の人生にとって多分最後の、その恋愛に耽溺し、その挙句、彼女をとり巻く他の男たちに、いわれのない嫉妬までを感じるようになった。

が、ベルモンテは、そんな自分をつき放して眺めるだけの勇気と、冷静さを持っていた。かつて、あのコロシアムで、自分に突きかかって来る相手の牛の動きを冷静に見とどけ、それをかわし、そして、その背に心臓までとどく剣を正確に突き刺して相手を屠ったように、彼は、自分が今相手にしなくてはならぬ、人間にとって一番厄介な嫉妬という敵と向い合った。

彼女を愛するために執着し、あまつさえ嫉妬する自分を、彼は愚かだと思った。そして、その愚かさを、彼はかつてのあの勇気と冷静さでの故に歓呼してたたえられた自らにふさわしくない

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo